

# 南河内のだんじり文化

経済学部4年 佐々木 達 哉

<目次>

I．テーマと視点

II．先行研究の紹介

III．堺・泉州のだんじり文化

(1) 堺・泉州のだんじり文化の概観

楡本多加三さんの聞き取りから

(2) 津久野町の場合

上野浩史さんの聞き取りから

IV．南河内のだんじり文化

河南町の場合

(1) 建水分神社と秋祭り

(2) 河南町今堂の場合

今堂村方への聞き取り

福田稔さんへの聞き取り

IV．結論

## I．テーマと視点

私は幼いころからだんじりに親しみがあり、毎年だんじりの季節を待ちわびている。現在でも南河内郡河南町で、だんじりを曳いている。そこで本論文では、私自身に馴染み深く、未だ研究がほとんどされていない南河内のだんじり文化について論じたい。

岸和田のだんじり祭りは、メディアでも取り上げられ、多くの人が認知しているだろう。しかし、だんじりは岸和田だけにとどまらず、泉州・南大阪を中心に各地で曳行されているのである。その中でも、南河内のだんじりには他の地域とは異なる特徴が多々ある。まず、地車に拡声器が積んであり、マイクで曳き唄を唄いながらゆっくりと練り歩く。他では見られない勇壮で豪快な祭りが行われている。ほとんどの地車が上地車であり、石川型である。重量は比較的軽く、上り坂でも進めやすい。また、見せ場や宮入の際は「差し上げ」「横しゃくり」「縦しゃくり」「ぶん回し」などを行う。見せ場などで

暴れることを「でんでん」「おうたおうた」と呼ぶ。岸和田に代表される急カーブを全速で駆け抜ける「やりまわし」を行うことはほとんどない。このように少し触れただけでも、南河内のだんじりは独特なものであることがわかる。

次に私が所属している地域のだんじり祭りがどういったものなのかを紹介したい。私たちのだんじりは、建水分神社へ宮入している。実りの秋の収穫を建水分大神の恩恵として感謝祝慶する祭で、御神霊を神輿に遷し、神社から約1km下の御旅所（通称・比叡前[ひえのまえ]）へ神幸する。3市町村（富田林市、河南町、千早赤阪村）の各氏子地区から20台近くの地車が宮入りし、神輿を中心に全地車が参集した風景は河内随一と謳われる。その後、神輿神前において祭典を執行し、続いて各地区青年団が地車の舞台上で上方芸能の原点とも云われる「河内にわか」（即興の寸劇）を奉納上演する。また地車は、この宮入りの前後日も含めた計3日間にわたり曳行されるが、近隣の美具久留御魂神社（富田林市）や壹須何神社（河南町）等の秋祭りも同日であるため、この時期には付近一帯が刈り入れられた稲穂の香りと共に、秋の祭りに満ちた雰囲気包み込まれる。

地車宮入り順は以下の通りである。

- ①水分 ②森屋 ③川野辺 ④二河原辺 ⑤桐山 ⑥芹生谷 ⑦中 ⑧神山 ⑨寛弘寺 ⑩白木 ⑪長坂 ⑫今堂 ⑬南別井 ⑭北別井 ⑮寺田  
⑯南加納 ⑰北加納 ⑱東板持 ⑲下河内

（①～⑤＝千早赤阪村，⑥～⑫，⑬～⑰，⑱＝河南町，⑬，⑭，⑱＝富田林市）

この宮入り順は、原則的に「水上順」として、神社を起点に川上から川下へと決められた。尚、地車の宮入りは所有地区の事情により、地車曳行自体を差控える地区もあるが、ここ数年の宮入り台数は18台前後である<sup>1)</sup>。

本論文で取り上げる時代は、現代である。具体的には昭和30年代から現在までを対象としたい。私は研究を進めるにあたって、三つの視点を重視して論じることとする。一つ目は、南河内のマイクなどを使う独特なだんじり文

化はどのようにして生じ、広がったのか。これは南河内でしか見られない光景であることは、先ほど記述したが、このような伝統がいつ始まり、どのようにして広がっていったのかを知ることで、岸和田への意識や対抗心、マイクがついたことによる祭り自体への影響が明らかになってくるだろう。二つ目は、南河内のだんじりが岸和田のだんじりに対してどのような意識を持っており、そこからどんな影響を受けてきたのかに注目したい。これについては、一つ目の視点と重複する部分があるが、マイクの他に服装などの風俗や、逆に南河内が泉州地域に与えた影響があるのかどうかとわかると、周辺地域との関係性が明らかになるだろう。三つ目は、現在のだんじりを運営していくなかで課題は何かという点である。現在、だんじりの担い手は明らかに全盛期に比べると減ってきている。また、毎年の運営資金も不景気のなかで限られてきている。こうした状況は、だんじり祭りにどのような影響を与えていくのか。また、この点でも泉州地域とはどうちがうのか。以上、3つの視点からだんじり文化を見つめることで本当のだんじりの姿が見えてくるだろう。

## Ⅱ．先行研究の紹介

まず、だんじり祭りについて一般的に記述した先行研究としては、『大阪狭山市史』<sup>2)</sup>、『岸和田市史』<sup>3)</sup>などがある。『大阪狭山市史』では、市内のだんじりには上地車と下地車のだんじりが混在していることや、近年はだんじりのコースが大きく変更され複数の地区が対になって曳行する連合曳きも盛んに行われるようになってきたことが記述されている。そこから地区ごとの祭りから、さらに広い地域全体の祭りへと変化していることがわかる。『岸和田市史』では「だんじり祭り＝喧嘩祭り、危険で事故が起こる」というイメージを取り除くための取り組みについて、戦後を中心に記述している。だんじり祭りでは、毎年死傷者が発生する事故が起きていた。事故は、急カーブを全速で駆け抜けるため、転倒やだんじりに挟まれるなどして起きている。事故

防止のためにブレーキをつけるよう指導を行い、各自治体が対策を話し合い改善に努めているという。しかし、いずれの市史もだんじりの研究という意味では、だんじり祭りを担う人々の側から見た事実が十分掘り下げられておらず、表側から見ただんじりの記述という点は否めない。

堺・泉州のだんじりに関する数少ない著書として、松本多加三氏の『だんじり堺』<sup>4)</sup>がある。これは、堺地域のだんじり祭り全体を取り上げ、だんじりのルーツや変遷、さらには、その各地区一つ一つのだんじりの紹介は、写真も交えた充実した内容である。

江戸時代前期に始まったとされる岸和田のだんじり祭りだが、その頃には他所にもだんじりが存在し、特に堺のだんじりは、他地域に貸し出されたりすると記録も残っているという。しかし、堺のだんじりは、明治29年8月1日に、だんじり同士が鉢合わせした際の喧嘩がもとで曳行全面禁止になった。この時の喧嘩では2人の死者が出た。その結果、旧堺市内では「祭り＝布団太鼓」になっていき、西日本各地に、だんじりを伝播させた堺(旧市内)自体には、だんじりが存在しなくなった。

昭和30年代は、堺が合併によって郊外に市域を広げた。その合併と前後した時期に、高度経済成長が始まり、堺の新市域では農村社会が崩落し始める。二男三男をはじめ多くが都市の勤労市民となり、地元の祭りにも参加できなくなった。そのため、青年団は名目だけの存在となり、だんじり曳行自体は取りやめになった。曳かれなくなっただんじりは、「無用の長物」となった。しかし、そうした時期にも曳かれ続けたのが「岸和田だんじり」であった。村落の人々ではなく商店主などをバックにして、だんじり曳行を続けた結果、まわりの地域からはうらやましがられ、マスコミにも取り上げられ、一気に注目されるようになった。

その後、1970年代半ば以降、一応の高度経済成長を成し遂げた堺新市域では、新しい共同体の象徴として「だんじり祭り」の復活をはかり出した。農村社会崩壊後は、農地の減少で、不要となった溜池ができ、それを売却する自治会が続出し、得たお金でだんじりを購入(新調)するようになった。再

開されただんじり曳行は、青少年に感動を与え、祭礼日も週休制に合わせ土曜・日曜になった。その結果、学生や勤労市民も参加しやすい「新しい市民の祭り」になっていった。最近では、「岸和田の真似」から「岸和田そっくり」に近づこうとしている。新しいだんじり自体も、堺型から岸和田型あるいは岸和田型との折衷型に変更され、堺型のだんじりが減っている。

現在の問題点は二つある。一つ目は、練習不足のままで岸和田風の「やりまわし」の真似が行われ危険であること。二つ目は、岸和田型や折衷型に変更する形の新調ばかりが、行われるため、「堺型だんじり」が消滅する方向にあることである。

堺では一度だんじり祭りが中断され、復活を遂げた時には「新しい市民の祭り」となっていたとある。それに加え、「岸和田の真似」という表現からわかるように、マスコミなどで大きく取り上げられた岸和田のだんじりは、堺だんじりに大きな影響を与えたことは、確かなようである。その一方「岸和田の真似」をすることによって、危険な「やりまわし」が増え、伝統の堺型だんじりが姿を消しているとあるが、このような点は南河内ではどうであるのか。また、桧本氏が言うように、本来だんじり祭りは農業と密接に関係していた。南河内でも農業は盛んであり、農村社会との関係で、昔からだんじりを曳いている人達にとって、だんじり祭りのあり方はどう変化していったのか。それとは反対に、現在の若者たちにとって、だんじり祭りのあり方はどうなのか。それらを検討していくことが必要である。

次に、大阪樟蔭女子大学人間科学部研究紀要6号から、野中亮氏の「鳳だんじり祭り」の概要と課題 伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容」<sup>5)</sup>を取り上げて紹介する。この論文は、現在の鳳だんじり祭りについて調査し論じたものである。だんじり祭りの運営に関わる自治会や、青年団などの地域組織や、現代における祭りのあり方やその変化への注目という方法は参考になる上、岸和田との関係についても言及しているため取り上げたい。

鳳だんじり祭りは、鳳駅北側にある美波比神社の秋期例大祭の通称であり、日本の伝統的な秋祭りと同様に五穀豊穡祈願を目的としたこの祭は、毎年10

月の最初の週末に行われている。堺のだんじり祭りは、歴史的には岸和田より古いという説もあるが、詳細は不明である。ただ、江戸時代の記録に「堺だんじり」という言葉もあり、いわゆるだんじり祭りが江戸時代にこの辺りから西日本に広がったことは確かなようである。近代に入ると、先に見た松本氏の著書にも触れられていた明治29年の事件もあって、市内でのだんじり曳行が全面禁止になり、その結果、市内では「布団太鼓」が盛んになった。

一度は衰退した「堺だんじり」だが、昭和50年頃には「新しい地域の象徴としての祭」という形で盛んになる。さらに新しい祭りには、岸和田志向が見られた。「やりまわし」の導入や、服装、掛け声といった曳行スタイルが、岸和田をモデルとしたものになったのである。「やりまわし」の導入によってだんじり自体も、下地車に新調する地区が目立つ。

新調すれば億はくだらないとされるだんじりは、維持管理だけでも相当の資金が必要となる。祭に必要な費用はすべて「御花」と呼ばれる寄付でまかなわれている。新調や修理など、イレギュラーに大金が必要になれば、これとは別に寄付が募られる。

鳳地区のだんじり組織では、現在ほとんど見ることでできない「講」などもかつては一定の役割を果たしていたようである。祭礼運営組織には、参加10地区の責任者が集まりスケジュールの調整、決定や祭り当日の警備などを取り仕切る「鳳地車連合会」、各地区のだんじり運営の元締めにあたる「保存会・運営委員会」、青年団OBが所属する「後ろテコ」、曳行の主力部隊である「青年団」があり、ほかに「子供会・婦人会」が存在する。

野中氏の論文では鳳だんじり祭りが、昭和50年頃以降、岸和田の影響を大きく受けてきたことが指摘されている。野中氏は、岸和田は鳳のモデル＝ライバルであるとし、鳳は「岸和田型の成功をおさめただんじり祭り」であって、それを目標とする限り「岸和田のようにする」しかないとも述べている。岸和田志向の背景には、岸和田だんじりがマスメディアによって全国的に有名になり、観客も増え、行政等のバックアップを受けて「大成功」したことによるものであると野中氏は言う。中でも観客が増えたことによって、曳き

手側は「見物人が多い方が楽しい」からという理由で、コースやスケジュール・パレードの調整に腐心するという。鳳のだんじりが、岸和田志向によって祭りのスタイルが変わったように、南河内にも岸和田の影響があったのだろうか。これは先述した二つ目の視点に大きく関わることで、少なくとも鳳地区では、岸和田の影響を大きく受けたと言える。

これまで紹介してきた先行研究はいずれも岸和田や堺・泉州地域に関わるもので、実は南河内自体のことを直接述べているものは皆無に等しい。それに、だんじりについての史料も、南河内に限ってみるとほとんど残っていない。そこで、本研究では、南河内を中心として、だんじりに詳しい方々への聞き取り調査を中心に論述を進めることとする。本論文では、南河内独自のだんじり文化の形成について、聞き取りで得られた成果をもとに、自分自身の経験も踏まえて考察する。結論では、南河内のだんじり文化の形成史について仮説を立ててみたい。そのために、南河内のことを理解するための比較対象として、岸和田や堺のだんじりも適宜取り上げいく。

### Ⅲ．堺・泉州のだんじり文化

#### (1) 堺・泉州のだんじり文化の概観 榎本多加三さんの聞き取りから

2009年9月15日、榎本多加三さんに聞き取り調査を行った。榎本さんの聞き取りで主たる対象とした地域は、堺市南区である。堺市南区域は、市域の南端に位置し、西は和泉市、東は大阪狭山市、東南は河内長野市に接している。区域は泉北ニュータウンを中心とした計画的市街地とその周辺の農地、集落地、丘陵地などからなっている<sup>6)</sup>。榎本さんは、雑誌『堺・泉州』の編集者であり、だんじりについての著書『だんじり堺』も執筆した郷土史家である。自分の生まれ育った泉州の文化を広めようと、だんじり以外の歴史や文化も含めて研究している。

榎本さん自身は、現在62歳で、幼いころから小学校まで現在の堺市南区に含まれる榎尾のだんじりを曳いていた。しかし、榎尾では昭和40年頃から曳

かれなくなった。祭りの担い手である村の若衆は、農家の子供が中心であったが、高度経済成長とともに工場に働きにでたため、曳き手がいなくなったのである。しかし、だんじりの曳行は昭和50年～60年代に復活した。復活のきっかけは、若者には岸和田の影響が大きく、老人たちは昔のまとまりを取り戻そうとしたためであったという。

現在のだんじり祭りは、若者中心の豪快で勇壮な祭りになってきているという。昔は、子供も老人も一緒にのんびり曳いていたが、現在は、良い意味では若者たちの新たな伝統になってきているが、悪い意味では老人や子供を排除する祭りになってきている。昔は上地車の方が多かったが、完全に岸和田の影響で下地車に変更するところが多い。そういう意味では、南河内に上地車が多く残っているのは、昔からの伝統を守ってきた結果と言えるだろう。

「伝統」という点では、岸和田に近い泉大津では、まだ上地車が多く、「かちあい」という地車同士をぶつけるケンカのような伝統があったのを、現在では地車同士を合体させるというスタイルに変化させることで、新たな伝統をつくっている。確証はないが、南河内にマイクが付き始めたのは、昭和50年頃ではないか。

服装に関しては、岸和田も約30年前までは、私服で曳いていた。現在のよな祭りの完全なスタイルが確立されたのは、ここ10年ぐらいであり、岸和田は時代の最先端と捉えているところが多い。岸和田では、様々な商店がだんじりグッズを扱っており、「だんじり産業」が完成している。堺のだんじりパレードは、TVで岸和田のだんじりが放送されるようになった昭和40年～50年代に始まった。パレードなどが始まったことで、以前は宗教行事として行われていただんじりが、今は若者がいかに煌びやかにするかということに重きが置かれるようになり、宗教的側面が薄れ、氏子意識も無くなってきた。

以上の桧本さんの聞き取りからは、Ⅱでも触れた岸和田の影響という点が桧尾地区でも見られた点、南河内では逆に岸和田の影響を受けず上地車を多く残していることから、昔からの伝統をよく残している可能性があるとした点などが注目されよう。

(2) 津久野町の場合 上野浩史さんの聞き取りから

2009年8月9日、上野浩史さんに聞き取り調査を行った。上野さんの聞き取りで取り上げる地域は、堺市西区津久野であり、津久野は野中氏の論文で扱っていた鳳地区の隣町にあたる。堺市西区は、西には大阪湾が広がり、南西部は高石市、和泉市と接し、南海本線、JR阪和線、阪堺線の鉄道や阪神高速湾岸線、国道26号などの幹線道路が整備されている<sup>7)</sup>。上野さんは、だんじり好きがこうじて、ミニチュアだんじりの製作も行っている方である。

上野さんは、現在46歳で、堺市に住んでいる。生まれは堺市西区津久野であり、その後中学校の時に大阪狭山市に引っ越し、30年くらい大阪狭山市で過ごした。所属していた青年団は、堺市津久野の大東青年団である。引っ越しする前(小6まで)まで実際に祭りに参加し、狭山に引っ越してからは津久野のだんじりをギャラリーとして見に行っていた。青年団へ正式に入団したのは、働きだしてから30代前半で、友人の誘いで入団した。2年前に、会社での足のケガが原因で走れなくなったので卒団した。もし、ケガしていなかったらまだ続けていたという。青年団に入団してからは、酒の席に呼ばれるのが大変だった。また、綱元をしていた時に、カーブなどでこけた子供たちを助ける仕事で、目が離せず気を遣うしんどいものだった。だんじり祭り自体の目的は、五穀豊穰の秋祭りと認識している。

青年団の数は、年々少なくなっているが、まだまだたくさん人はいる。地区の意思決定は、東誠会という40代をトップとした30代から参加する会があり、そこでまず議論がなされる。そこから、それより下の青年団に指示を下るような仕組みになっている。周りの地域とは、仲が良く喧嘩は聞いたことはないという。喧嘩など祭り中の不祥事などで、祭りに出られないだんじりは見たことがない。常に津久野地区の7台が集まって曳行している。3～4年前に新しいだんじりができた時も、抵抗なくその地区を仲間の輪に入れた。その中でも「やりまわし」だけは、他地区に負けたくはなかった。昔はすべてのだんじりが上地車だったが、今は1台を除いて、ここ10年間足らずぐらいの間にすべて下地車になっている。これは岸和田のようにやりまわ

しがたいからだという。

祭りの行程は次のようになっている。まず試験曳きは9月中旬に終わらせている。本祭は10月の第一週の金、土、日である。金曜日は、昼からだんじりを出して、家原（津久野地区ではないが、昔から付き合いがあるという）まで行きパレードを行う。土曜日は、朝から宮入し、昼は津久野駅前パレードに参加する。夜は地元（大東）を回る。日曜日は、朝から津久野中を回り、昼・夜とも津久野駅前パレードを行う。パレードでは10回以上やりまわしをし、1日の数を合わせると平均40～50回はする。だんじりは、22時にはしまふことになっているが、実際は鳴り物をとめて0時ぐらいまで出している。

岸和田と津久野の違いは、後者は晩も走り回ること。岸和田は晩走らないのではないかと。津久野の中でも地域によっては、昼間のゆっくり曳行している時に数時間ファミリータイムというものをもうけており、子供たちをだんじりの屋根に乗せたりしている。当日の仕事は、津久野は人が十分にいたため、自分の役割以外の仕事はあまりすることがない。その点で、各自が自分の仕事に集中して専念できる。当日の服装は、全員法被着用で曳くのが当たり前で、着ていなければ参加できないくらい厳しい。全員法被着用というルールは、岸和田の伝統の影響があるという。毎年の資金源は「御花」でまかなう。イレギュラーなことは、地区の積立金でまかなう。御花代は毎年大幅には減っていない。

以上の上野さんの聞き取りからは、曳行スタイルが南河内と違い「やりまわし」に重きを置いた岸和田のスタイルと同じということがわかる。だんじり自体も上地車からほとんどが下地車に変更されている点に注目でき、祭りに参加する人が多いという点も注目される。自身の経験で南河内では、曳き手が少なく当日の仕事配分にも苦心している地区もある中、津久野では自分の役割だけに当日は集中することができるということもわかった。

以上、Ⅲでは南河内との対比も念頭に置いて、堺・泉州のだんじり文化について見てきた。そこからは、堺・泉州地域では岸和田に大きな影響を受け、多くの地区のだんじり自体が下地車に変更された点や、南河内と堺・泉州地

域では曳行スタイルがマイクを使った曳き唄をメインにしたものと「やりまわし」を中心としたものとで全く違うという点が、わかってきたと言えよう。

#### Ⅳ．南河内のだんじり文化 河南町の場合

##### (1) 建水分神社と秋祭り

2009年11月28日 私が所属しているだんじりが、宮入している建水分神社<sup>8)</sup>の禰宜である岡山博美さんに聞き取りを行った。聞き取りの対象は、建水分神社に宮入している地区全体のだんじりについてであり、時代は主に30年前ごろ（1980年前後）から現在のことである。

岡山さんは現在39歳で、青年団自体はどこにも所属したことがない。祭りの目的は、実りの秋の収穫、特にお米を刈り取ってそれを神様のおかげとして、氏子みんなで祝うことが本来の意味である。とはいえ、職業として農業に関わっている人が、特に若い人は少なくなっているため、収穫を祝うという意義は薄れてきているのが現状である。

南河内のだんじり曳行が始まったのは、江戸時代中期ぐらいで、貨幣経済が発達していない時は、米＝金銭であったため、その米を車（大八車）に載せ、神様の前に持ってきて感謝し祝うことから、だんじりが始まったのではないか。大八車をもっと豪華に装飾していくにつれて、現在のような地車の形になってきたのだろう。南河内のだんじりに上地車が多く残っているのは、芸能の一つであり伝統でもある奉納俄をするため、奉納俄をするために、下地車にはない舞台（欄干）を後付けしたのだろう。

宮入するだんじりの数は、例年18台前後で、氏子の住んでいる地区のほとんどが宮入している。20年前ぐらい前から、各地でだんじりを出したいという思いが強くなり、新調や修理をする地区が目立ち、現在の宮入数になった。その背景には、岸和田だんじりが多くのメディアで取り上げられるようになり、一種の「だんじりブーム」が到来したと感じた。もっと以前は、せいぜい13台前後の宮入だった。青年団の立ち位置としては、南河内は中心であり

主力だが、岸和田では祭りの中心は40代ぐらいで、青年団は「ひよっ子扱い」であり、青年団より上の年齢の人たちの役割に違いがある。だんじりは本来ならば「建水分神社秋祭」に付随したものであり、「だんじり祭り」ではない。岡山さんは「だんじりブーム」が到来した後は、一番肝心なはずの宮入が、単なる見せ場の一つとして捉られてることが多くなったと感じている。

マイクは20年以上前から付いていただろう。現在は発電機を載せるようになり、給油さえすればマイクが切れることはないが、当初はバッテリーを積んでいたため、バッテリーが減ると、よくマイクが切れていた。バッテリーを積んだのは、夜の提灯をローソクから電球に替えた頃からであろう。曳き唄は以前一時的に唄ったりすることがあったが、現在のようにいつでも唄っていたわけではない。現在のやり方は一種の流行りではないか。曳き唄を唄い始めてから宮入にかかる時間が長くなった。だんじりが豪快でにぎやかになる一方で、マイクやスピーカーなどの騒音は弊害になってきている。だんじりの曳行のために、急病や怪我で病院に運ぶ場合、救急車がすぐに通れないことや、マイクの騒音は睡眠の妨害にもなっている。

一度に18台前後もだんじりが集まる宮入は、他ではほとんどないため、大阪府外からも見物にくる人もいるため、ギャラリーは多い。これはインターネットなどの情報が発達したためでもあろう。しかし、ギャラリーが増えるごとに、だんじりの暴れるスペースがどんどん狭くなってきている。

岸和田に対する意識という点については、一般の人から見ると同じだんじりと思われているが、青年団の若者たちなどはスタイルが全く違うものとして捉えており、岸和田に対して、「あのスタイルのどこがいいのか」と思う人が多いだろう。しかし、鉦の導入や、服装の統一、各地区ののぼりや御神燈、団長への垂れ幕など、岸和田の影響を受け始めたことが多いというのも事実である。こういった岸和田の真似は、ここ10年ぐらいの間で広がった。やはり、TVの影響が大きいのではないか。対抗意識はあるのだろうが、だんじりに対する意識（上下関係や組織体系の堅固さ、若衆の意識など）は、岸和田の方が数段上を行っている感じがする。若衆の髪型にしても、岸和田は誰

に言われなくとも短髪黒髪にしているが、南河内はまったく逆で、金髪や奇抜な髪形が多い。社会的モラルに関しても、岸和田は休憩した後にゴミが一つも落ちていないことや、お茶を飲むにしても上の人の許可がないと飲まないほど上下関係が厳しいと聞かすが、南河内はそれとはほとんど逆である。

数十年前は、だんじりが夜中に出でいたり、幹線道路で暴れていても苦情を言う人が少なかった。しかし、新興住宅地が増え、他所から引っ越してきた住民の中には迷惑と思う人が増えた。10～20年前は苦情の申し出が、祭りが終わった後にしか出てこなかったが、近年は急速に携帯電話が普及したため、苦情の通報が手軽にできるようになった。だから、現在では、警察の指導もより厳しくなり昔のように幹線道路を封鎖して暴れることができなくなった。そこで、公道から一步入った広場や駐車場などで暴れることで、現在のようなパレードが始まったのではないかと推測される。

以上が岡山さんからの聞き取り内容である。ここでは岸和田と南河内との関係が二つの側面から語られていて興味深い。一つは祭りを支える組織やその秩序（上下関係）の対照的なあり方である。もう一つは、そうは言っても岸和田の影響も小さくはないことである。また、南河内に上地車が多く残っているのは、伝統である俄をするためであるのではないかという点にも注目できる。

## (2) 河南町今堂の場合

### ①今堂村方への聞き取り

2009年11月7日、今堂村方3名の方に聞き取り調査を行った。取り上げる地域は、河南町で、大阪府の南東部に位置し、大阪市の中心部から25km圏にある。北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村と境を接し、東は葛城山脈の稜線が奈良県の葛城市、御所市に接している。また、古くから開けたこの地には、さまざまな古墳、遺跡などの文化財があり、自然と歴史に恵まれた緑豊かな文化の町である。今堂は、河南町内でも世帯数が少なく比較的小さな村である。以下で記述する内容は、昭和30年前後から昭和40年頃の当時

の様子である。

T .Iさん(66) S .Fさん(67) M .Nさん(73)計3名に聞き取りを行った。青年団に入団したきっかけは、近所の方々と付き合いと、人が少ないから仕方なく、半強制的に入団した。T .IさんM .Nさんは今堂青年団に所属し、S .Fさんは寺田青年団に所属していた。

入団してからは、事故を起こさないようにする責任感がすごく付いた。入団したことによって村との一体感が深まり、だんじり自体も大事に扱おうと思った。人が少ない地区には、当日手伝いに来てくれることもあったという。また今より、だんじりを曳いてる者同士が助け合いするのが良かった。40年前ぐらいに約10年間は、曳き手がいなくなり曳行しなかった。今堂の場合は、生まれる子供が男子より女子の方が多かったせいもあるようだ。他地区では、ずっと曳いていたところもあった。卒団したのは、会社が忙しかったり、約10年間曳かない時期があったときに、青年団を辞めた。

だんじり祭りの目的は、五穀豊穡を祝うものである。宮入する建水分神社は、田んぼに水を分ける神社であり、水上のだんじりには頭が上がりなかつた。また、「神さん」と一緒に祝うものとされ、神輿に「神さん」を移して、御旅所（通称比叡前）まで持ってくるのはそのためであるだろう。

昔の青年団は今の青年団のような組織体系ではなかった。団長も45歳ぐらいの人が務めていた。祭りの時の参加構成で対比するならば以下になる。

今 青年団・村咲会・子供会・婦人会・年行事<sup>9)</sup>

昔 青年団・年行事(村全体で曳行するという姿勢)

祭礼日は、10月の16、17、18日が祭りの日として定番だった。平日でも祭りが行われていたため、よく学校にいる曳き手の若衆を、青年団が直接迎えに行った。しかし、曳き手が少なくなってきたため、第三週の金、土、日に変更になった。マイクが付いたのは、20年前ぐらいで、きっかけは周りの地区が付け出したから。その他に、提灯の明かりはローソクを使っていたので、提灯が燃えることも少なくなかった。そこで、マイクを付けるには 배터리

ーを積む必要があったため、ついでに提灯のローソクも電球に替えたのだらう。今はほとんどの地区が鉦を積んでいるが、鉦はここ10年ぐらいで広まった。鉦は岸和田の影響が大きいのではないか。昔は伊勢音頭や草津節などの祝い節を、地声でゆっくり唄っていたのに対して、マイクや鉦が広まってから曳き唄自体も多様化して早いリズムになっていった。駒のすべりを良くするグリスの独特の匂いや、炊き出しででた松茸の匂いは、祭りの匂いとして感じていた。

祭りの服装は、一応法被も用意されていたが私服が多かった。今のような全員が法被を着るスタイルになったのは、ここ10年ぐらいからである。村自体が大きい地区がやり始めると流行っていった。だんじりの飾り付けは、モールで飾っていた。この飾り付けでは他地区には負けたくなかった。それに加え、古いだんじりは黒ずんでいるので、隠すために飾り付けをしていた面もある。逆に、新調しただんじりは、ほとんど飾り付けはせず、綺麗なだんじりそのものを見てもらうようにしていた。当時のだんじりの曳行は、今では行かない太子町などかなり遠くまで行っていた。この頃は警察の取り締まりがなく、御花を集めるために遠くまでいった。御花のお礼として俄をするのが楽しみの一つだった。今とは違ってあちこちで俄を披露していた。村花をもらいに行くにも順番があり、村の中で一番大きい家から順番に取りに行かないと、金額で揉めることがあるため。今と違いのぼりなどがなく、経費がほとんど掛からなかった。そのために金銭面で赤字はでなかった。

だんじり以外のところでは、青年団は正月のとんど<sup>10)</sup>の管理を任されていた。当時は、道が悪かったため、祭りの前に道を舗装する作業を青年団でやっていた。道が悪いせいで、今の祭りのように「横しゃくり」などをすると危険なためしなかった。

パレードの始まりは、平成に入ってからだろう。車の通行が増え、だんじり一台につき警察官1～2人は一緒について曳行していた。しかし、さらに車が増えると警察の監視や交通整理が追いつかなくなり、暴れるときは一か所に集まるように指示され、それがパレードとして定着し、広まっていった

のではない。今は中学校が一つしかないが、昔は中学校が多かったため、同じ河南町内でも知り合いが少なかったので、現在のようなパレードがなかった時代は、同じ中学校区域のだんじりが集まるということはあった。

以上の今堂村方への聞き取りからは、今堂では約40年前に10年間ほどだんじりが曳行できなかったという点や、現在より警察の取り締まりも厳しくなく、かなり遠くの地域にまでだんじりを持って行っていた点などが注目できる。

## ②福田稔さんへの聞き取り

2009年8月18日、現役の今堂青年団福田稔さんに聞き取り調査を行った。調査対象地域は先ほどと同じ今堂である。主に現在のだんじりのことを取り上げる。

福田さんは、現在21歳で河南町の今堂青年団に所属しており、2005年から順に、唄手、会計、若頭、若頭、会計と近年は毎年、役を請け負っている。小さい時からだんじりに親しんでおり、中2のときから直接関わり始めたが、正式に青年団に入ったのは、高3のときである。本来なら正式入団は高1だが当時、前年に寛弘寺との喧嘩が原因で地車曳行中止であったため入れなかった。また高2の時は自ら辞退し、正式入団したきっかけは、今堂が13年に一度の神輿かきの年に当たり、村の若衆は強制参加であったため、半分仕方なく入団した。入団したころは、今堂として人数(他所者も含む)なども「全盛期」であり、そのときのOBの祭りに対する面倒くさいぐらいの「アツさ」には驚いた。また意外に青年団内の上下関係は厳しくなかった。

青年団員は4年前に他所者の参加が禁止以降<sup>11)</sup>、1名増えたのみ。少子化もあってこれからも増える可能性は低い。以前はグッズ・「新曲作り」<sup>12)</sup>は他地区には負けないと意識していたが、今は人員、勢いで負けるのは目に見えているためほとんど意識していない。

運営組織は、今堂自治会(村方)をトップに 青年団・村咲会・子供会・婦人会・年行事となっている。意思決定についてみると、各地区青年団同士

の取り決めに関わる決定権は団長にあり、その他出費に関わることなどは、青年団独自の予算がほとんどないため、「村方」や「村咲会」との会議による議決を経る必要がある。毎年の資金源は「御花」と村の繰越金でまかなっている。青年団だけでなく村自体のお金が危なくなっている。しかも、不景気の煽りか「御花」の新規開拓はほぼできない状態である。

祭りの行程は次のとおりである。祭りは毎年10月の第3週金、土、日に行われる。金曜日は夕方から試験曳きを行う。土曜日は、朝から昼過ぎまでは宮入し、夜は遥拝所で白木三郷とあわす。日曜日は、朝から町内曳行の後、夕方よりサンヨーメディカル<sup>13)</sup>にてパレードに参加し、夜は関西電力前<sup>14)</sup>にて他地区数台と集まる。

当日の役割配置は、青年団はマイクで曳き唄を唄う、交渉、鳴り物、前枠であり、OBは追テコ、横枠、前枠、交通整理となっている<sup>15)</sup>。見せ場での警備は、各地区青年団交代で行う。

南河内にマイクが付き始めたのは、おそらく20～25年前だと思うが確証はない。

服装などは近年、オリジナルTシャツ、青年団・OB揃いの法被、団扇の使用などとなっており、これは泉州の影響を受けていると思う。パレードはかなり前から場所を変えながら続いているが、いつ始まったのかは不明である。

以上の福田さんの聞き取りからは、今堂では曳き手が少ない上にこれからも増える見込みがないという点や、村の運営金が少なくなっている上に、「御花」も新規開拓ができないため祭りの予算がなくなっている点などが注目される。

IVでは、南河内のだんじりの実態を具体的に見てきた。そこからは、南河内ではだんじり自体には岸和田の影響を受けていないが、それ以外で団扇や法被など細かいところでは影響を受けた点や、だんじりを取り巻く環境の変化により、パレードや障害がおこってきたという点などが、わかったと言える。

## V. 結論

以上の聞き取り内容から、わかってきたことをまとめていきたい。

第一に、南河内を問わず多くの地域で、高度経済成長を経るなかで、だんじり祭りの在り方が変わってきたということである。桧本氏が先行研究で述べている堺のように、もともとは農村社会の中で始まっただんじり祭りは、高度経済成長によってだんじりの担い手が、次々と村を出て行ったため曳行できなくなった。これは南河内でも同様であった。

しかし、第二に堺・泉州でもそうであったように、高度成長が一段落したのちになって祭りは性格を変えながら、再び活性化してきた。高度経済成長後の南河内では、だんじりにマイクが付くようになり、ここ20年ぐらいの間でパレードも開始され、曳行スタイルが変化し、その過程で若者が中心の祭りとなっていく。すなわち、南河内の独自の曳行スタイルは、せいぜい約30～20年ぐらい前から確立された比較的新しい「伝統」という推測ができると思われる。

さらに、第三に、南河内のだんじり祭りは、岸和田に大きな対抗心を抱く一方で、気付かないうちにその大きな影響を受けた点も注目される。これまで一般的に、だんじり自体がまったく違うものとして捉えられてきたが、服装・団扇・鉦・垂れ幕・御神燈など様々なものについて、岸和田が流行の最先端であり、現代におけるだんじり界の「パイオニア」と捉えることができる。その意味では野中氏の論文で述べられていたように、鳳にとって岸和田が、モデルでありライバルであるという捉え方が、南河内にも当てはまると推測できる。

しかし、第四に、南河内のだんじりには、俄という古い伝統が長く受け継がれてきた点も重要である。俄をするためには、舞台(欄干)がついた地車、すなわち上地車が必要である。先行研究に触れた際にも述べたように、堺・泉州地域が「岸和田」「やりまわし」に憧れて、上地車から下地車に変更され

ていくなか、南河内では俄をするためという理由で上地車を維持したのである。これは周りの地域に影響されず、上地車を守り続けてきたという点では誇りであると私は感じる。

それに加え、マイクを使って、曳き唄を唄いながら曳行するというスタイルは、どこの地域にも影響を受けない形につくられた南河内独自のスタイルだと推測できる。私は、岸和田がそうであるように、今後は南河内自体が周りの地域に影響を与えるような祭りを創造できたらよいと願う。

最後に本論文で果たせなかった課題をあげておく。筆者が実施できた聞き取りはわずかである。南河内全体として見たときに、この結論で述べた諸側面が、妥当かどうかはさらに検討が必要である。今後は河南町以外の南河内地域全体を視野に入れて調査することが、肝要であろう。また、反対に岸和田やその周辺の地域が、南河内のだんじりについてどう見ているのかという点も興味深く、比較の視点からも追求が求められるだろう。

## 注

- 1) 建水分神社ホームページ<http://www.takemikumari.com/> (2009年12月2日確認)。
- 2) 大阪狭山市史編さん委員会 / 大阪狭山史編さん室『大阪狭山市史』第9巻(大阪狭山市役所, 1997年) 441頁~448頁。
- 3) 岸和田市史編さん委員会『岸和田市史』第5巻(岸和田市, 1977年) 555頁~582頁。
- 4) 桧本多加三『だんじり堺』(堺泉州出版会, 2000年)。
- 5) 野中亮「鳳だんじり祭り」の概要と課題 伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容」(『大阪樟蔭女子大学人間科学部研究紀要』6号, 2007年)。
- 6) 堺市ホームページ<http://www.city.sakai.lg.jp/> (2009年12月5日確認)。
- 7) 同上。
- 8) 千早赤阪村水分にある神社。古くから田に水を分ける神社として広く親しまれている。
- 9) 村咲会とは、各地区にある一般的な30~40歳代のOB会と、50~70歳代の村方の組織が合わさったような会。年行事とは、祭りの期間中、軽トラックに荷物を載せてだんじりについていき、炊き出しなどの世話をしてくれる組織。
- 10) 竹で大きな円錐状の束をつくり、点火し大きな焚き火をおこしたもの。門松などの

正月飾りなどを炎の中に投下し燃やす。

- 11) 他所者の参加禁止について触れておく。現在でも曳き手が少なく、他所から応援には来てほしいが、他所から来た人には無責任な人が少なからずおり、揉め事が起きることがあった。そこで、地下(じげ)より他所が多くなり統制がとれないため禁止にしたという。また、炊き出しなども地下が用意したものを、人数の関係で他所のほうが多く取ってってしまうなど、村としての祭りができなくなったという問題もあったという。
- 12) 曳き唄として、演歌の替え歌を歌うことがある。各地区が毎年考える新しい替え歌を「新曲」と呼ぶ。
- 13) 河南町白木にある工場。工場の前にある駐車場にて、今堂を含む白木七地区でパレードを行う。
- 14) 河南町寺田にある関西電力変電所の駐車場。
- 15) 交渉とは、当日各地区のだんじりとすれ違うときなどに、だんじりの頭を下げて礼をするかなどの交渉にあたる役。鳴り物とは、鉦・小太鼓・大太鼓を曳行中に叩く青年団のこと。前杵とは、だんじりの前にせり出した木の杵。8人ぐらいが入り押すようになっている。追テコとは、だんじりの後ろに差す2～3mの木。てこの原理でだんじりの方向を決める。横杵とは、だんじりの横に付いている木で、「横しゃくり」時の重要な基点である。